

Title	人口学説史上に於けるグロート及びペチイ
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.5 (1925. 5) ,p.675(1)- 696(22)
JaLC DOI	10.14991/001.19250501-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250501-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250501-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮内省御用達

株式會社 東洋軒

電話高輪 特長 二、八七〇  
二、八七一

○生命保險會社協會地下室

東洋軒支店 丸の内 一、六二三

三田學會雜誌 第十九卷 第五號

人口學說史上に於けるグロウメント及びベチイ

高橋誠一郎

經濟學が先づ第一に取扱ふものは、言ふまでもなく、吾人が物質財追求の行爲によつて人間社會に生起す可き諸々の結果である。然も富に對する欲望のみを抽象して經濟學を論述するは極めて效果少なきものなるが故に、總べての經濟學者は早くよりして、閑暇欲及び結婚欲の如き之れと拮抗する本源的欲望の一團をも之れに附加しなければならなかつた。斯くて經濟學は其の發生の當時よりして人口問題を包含して居つた。而して英國經濟學の一先驅たりし「政治算術」(Political Arithmetic)は主として人口統計に關する努力であつた。

マーカンチリズムの經濟論者は何れも皆な經濟原理よりも經濟政策を考察せるものであつた。而して國民的繁榮の主たる要素を算へんとするの努力は其の國の進歩を判斷するの標準を設けんとする極めて重要な目的に貢獻する所があつた。而して土地は租税の抽出せらるゝ主たる源泉たるが故に、一國の發達を量定する最良の標準は地主階級の繁榮によつて與へらるゝの觀があつた。第十七世紀の全部を通じて、地代の騰貴は地主階級に對する特殊の賜物に非ずして、一般公共に對する利得として觀せられた。斯くて一見、利子を辯明すると共に、併せて地代を非難するに庶幾き説を作せる John Locke 等 (Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money, 1692, pp. 55-56.) 地代の低落を以て國富減退の確實なる徵候なりと看做した。曰く「諸君の富の減退せる確實なる徵候は地代の低下である、而して其の引上は國民の注意に値す可きものである。蓋し土地所有者並びに公共の眞の利益は、利子の低落に存せずして、地代の引上に在るが故である」と。(ibid., p. 111.)

而して又た富の源泉として勤勉を重視せる Sir William Petty 等は、一國の人口増加を以て國家繁榮の最重要なる象徴と看做すの傾向があつた。(Fewness of people, is real poverty.—A Treatise of Taxes & Contribution, 1652, p. 16.) 其の時代の一般經濟思想を傳承して、勞働を以て富の父と思料し、土地を以て其の母と觀じたる Petty は斯くの如き總念に對して「政治算術」を適用せんとした。人民は國富の父であつて、土地は其の母たるが故に、是れ等配偶の孰れと雖も、國家經濟の棚卸しに際しては之れを遺漏すること能はざるものである。而して人民を以て土地に加算せんが爲めには、是れ等兩者をして共通なる價值の標準に歸せしめなければならぬ。彼れが是れ等兩者間の方程式を作製せんとするの努力は爰に發する。「總べての物は土地及び勞働なる二個の自然的名稱によつて評價せらる可きものである」。是に於て乎、彼れは「土地及び勞働間の自然的平價(a natural Par between Land and Labour)を發見し、斯くて兩者を以てすると等しく、或ひは却つて之れよりも善く、兩者中の一方のみに由つて價值を表示し、而して吾人が片を磅ポンドに換算するが如く、容易に且つ正確に、一方を他に換算し得可き」ことを欲したのである。(ibid., p. 26; cf., The Political Anatomy of Ireland, 1691, pp. 63-64. 大正九年版拙著「經濟學史研究」七八〇—七八

二頁)。

Pettyは、經濟上の目的の爲めには土地及び其の産物、並びに貨幣、勞銀及び人口に關する徹底せる調査を必要とした。而も、彼れは這般の計算を行ふことを以て、縱し、全然不可能に非ずとするも、極めて困難なる事業なりと做して之れを排するの論あることを知悉して居つた。然しながら、彼れは之れに對して次の如くに答へる。「此の事にして行はるゝまでは、貿易は人の思索を用ふるには餘りに推測的なる事業である」と。(ibid., p. 34)。當時の一般論者は最も曖昧なる計算のみに據つて論議し、急速なる國富減退の預言の如きは唯だ單なる風聞に基ける場合が多かつた。若し實際上何等の衰微も存せざるものであるとしたならば、衰頹の原因を説明するが爲めに努力するは徒爾である。洵に正確なる報告の蒐集は當時に於ける最大なる必要であつた。這般の必要は二三の英國「王立協會員」(Fellows of the Royal Society)によつて十分に承認せられた。彼れ等は出來得る限り正確なる統計の蒐集に力を注いだ。而して彼れ等の間に於て Pettyの先驅者たりしものに其の親友 Captain John Grauntがあつた。

二

John Grauntの Natural and Political Observations mentioned in a following Index and made upon the Bills of Mortality, with reference to the Government, Religion, Trade, Growth, Air, Diseases and the several Changes of the said City. の初めて出版せられたるは一千六百六十二年始めのことであつた。彼れは同年二月五日、會員の間に頒つが爲めに其の五十部を王立協會に寄贈した。此の書は惟り協會の内部のみに止らず、廣く好評を博して同年内に再版せらるゝことゝ爲つた。一千六百六十五年初夏に於ける黒死病の再襲と共に此の書は再び社會の注意を惹き、同年、増補第三版を出し、更に同年内に第四版を出すに至つた。而して此の書は著者の死後、一千六百七十六年に至つて、其の第五版現れ、次いで一千七百五十九年 A Collection of the Yearly Bills of Mortality from 1657 to 1758. 中に加へられ、越えて一千八百九十九年 Charles Henry Hull によつて The Economic Writings of Sir William Petty. の第二卷に合掲せられた。匿名氏 (Dr. Gottfried Schultz)の手に成れる此の書の獨譯は Natürliche und politische Anmerkungen über die Todten-Zettel der Stadt London, fñnemlich ihre Regierung, religion, gewerbe, vermehrung, Luft,

Krankheiten, und besondere Veränderungen betreffend. として一千七百〇二年に出版せられてゐる。(Hull, op. cit., vol. ii, pp. 317, 318, 658-660.)

Grant は倫敦に關して利用し得可き報告を分析した。倫敦の過度の膨脹に對する頻々たる不平、並びに戰爭及び疫病に由る人口減退の憂慮は、倫敦市の現狀に關する正確なる研究を欲せしめた。而して Grant は是れを以て當るに Gresham College (Sir Thomas Gresham の遺言によつて寄附せられたる倫敦教育財團の施設) に集れる諸哲學者の注意を惹く可き「博物學」(natural history) の一部門であると主張した。(Grant, Natural and Political Observations, 5th. ed., 1676, Dedication to Sir Robert Moray.)

彼れは田園地方に於ける人口増加の割合を都市の其れと比較し、而して之れに對する自然的及び特殊的抑制を指示せんとした。倫敦の人口は出産によつて増加すること、其の周圍の地方の其れよりも遙かに緩慢なるものであつて、其の増加は主として來住に由るものである。地方に於ては洗禮式が葬式を超過するに拘らず、倫敦に於ては然らざる一般的原因は、同市に在つては出産年齢の住民に對する死亡者の割合が地方に於けるよりも大なるの事實である。然らざれば吾人は倫

敦が地方よりも不健康なるか、若しくは男女をして生殖力ならしむるの傾向大なるものありと稱せざるを得ないのであるが、斯くの如きは同市中、最も煤煙多く、臭氣甚しき部分を取つて Hackney, Newington 及び其の他の地方牧師管區の葬式及び洗禮式に比較すれば、さまで大なる差違を認め得ないのである。(ibid., pp. 61-62.)

然らば倫敦に於ける出産者が地方に於ける其れに比して割合に少數なる所以如何。Grant は其の理由八つを數へる。第一に朝廷若しくは法廷に用向を有する總べての者、及び同市に食料品を齎し、若しくは外國貨物、製造品及び珍奇の物品を購ふが爲めに上京しつゝある總べての地方民の大部分は其の妻を地方に残すものである。第二に好奇心に驅られ、快樂を求めて倫敦に居住せんが爲めに來る者並びに退役して隠居の生涯を送らんとする者も亦た同様である。第三に病養の爲めに上京する者は暫時の間は殆んど其の妻と交接することがない (do scarce use their Wives pro tempore)。第四に七年乃至九年間結婚を阻止せらるゝ倫敦の多數徒弟は任意に更らに其の以上の期間に互つて此處に留る場合が多い。第五に倫敦に於ける多數の海員は其の妻を後に残すものであつて、彼れ等の妻は男なくし

て子を産むか若しくは多數の男と亂交して (with the use of many promiscuously) 子を産む者よりも、空聞の裡に死亡するに至る者が多い。第六に煤煙、惡臭及び流通惡しき空氣は地方の其れよりも不健康なるが故に、身體の是に慣れたるものは他の地方に於けると殆んど等しく倫敦内に長く生活するを得るも、新來者及び兒童は然ることを得ない。而して前掲 Hackney 及び Newington に於ける相違が、さまで顯著ならざるは、是れ等の地方が倫敦に接近し、其の住民は大部分此の地に引退するの前に於て倫敦の空氣に先づ其の身體を害せられたるものなるが故である。第七に他に比して倫敦に於て行はるゝこと多き不節制なる飲食、殊に姦通及び私通は慥かに出産を妨ぐるものがある。蓋し十人の男子を許す女子は到底十倍の子を持つこと能はずして、却つて一人の子をも有せざる可きが故である。第八に倫敦に居住する者は地方に於ける者よりも、業務繁多にして、且つ、頭腦を勞することが多い。地方人士の勞作は肉體的勞働及び運動であつて、是れ等のものは總べて生殖力を増進するに反し、心意の不安は之れを妨ぐるものがある。(ibid., pp. 62-64.)

## 三

次いで Grant は女子に比し男子の多數なる事實を注意する。一千六百二十八年より一千六百六十二年に至る間に於て埋葬せられたる男子は二十萬九千四百三十六人に達するも、女子は十九萬四百七十四人に過ぎない。而も、倫敦は企業の大舞臺であつて、男性は女性に比して多數を占むるが故に、同市に於ては洵に其事あるを認むるも、他の地方に於ては然らざる可しと做して反對するものがあるであらう。而も同一期間内に洗禮を受けたる男子は十三萬九千七百八十二人であつて、女子は十三萬八百六十六人に過ぎずして、地方の計算も此の點に關しては倫敦の其れと正さに一致するものである。(ibid., pp. 64-65, 121-123.) 這般の觀察は Grant に結婚問題を論述するの機會を與へた。基督教は一夫多妻を禁止するが故に、之れを許すマホメット教 (Mahometism) 及び其の他のものよりも自然の法則、即ち神の法則に一致するものである。何となれば、一人の男子が法律上多數の婦人、即ち妻を有することを認めらるゝは、自然に於ても亦た一人の男子に對して多數の婦人存するに非ざれば、無意義なるが故である。(ibid., p. 65.)

而も斯くの如き所論に對して一疋の牡馬、牡牛若しくは牡羊は其の各々が多數

の牝を有するに由つて増殖の勢を大ならしむると做して反對する者あることは明かである。然しながら是れ等の種族に於てすら、自然には恐らく牝よりも牡の方多數なる可きであるが、人爲的に去勢馬、閹牛及び脱羴羊を作るが爲めに、牡の數牝に比して少と爲るのである。是に於て乎、經驗に徴して一疋の牡羊が何疋の牝羊を満足せしむ可きかを知られる場合に於て、吾人は脱羴去勢を行ふ可き牡羊の割合如何を知ることが出来るのである。即ち、假に一頭の牡羊が二十頭の牝羊に満足を與ふ可きものであるとしたならば、吾人は凡そ十九頭の牡羊を去勢す可きであるが、吾人にして若し僅かに十頭を去勢するとしたならば、其の十頭の各々が二頭の牝羊と亂交するに由つて、二頭の牡羊との交尾が増殖を妨ぐる範圍内に於て、之れを妨ぐ可きである。然しながら、吾人が全然其の一頭をも去勢することをしなかつたならば、恐らく牡羊二十頭の各々は牝羊二十頭の各々と交尾するが故に、牝羊の全部は孰れも殆んど全く受胎することなかる可きである。Grant は、去勢を行はるゝことなき狐、狼及び其の他の害獸が、日々屠殺せらるゝこと幾千なる羊よりも急速に増加することなき理由は是に存するものと観るのである。(ibid., pp.

65-66)。

次いで Grant は男子が女子を超過する割合を以て約十三分の一と積算する。斯くて男子が戰場に斃れ、災難の爲めに殺され、海に溺れ、刑に處せられて、婦人よりも横死を遂ぐるもの多きのみならず、植民地に赴き、外國に旅行し、若しくは學寮員及び十八才以上の徒弟の如く、獨身生活を持続する者婦人よりも大なるに拘らず、上述せる十三分の一の相違は一夫多妻を許すことなく、各婦人が一人の夫を有するを得せしむるのである。加之ならず、男子の生殖力は四十個年間持續するに對し、女子の其れは二十五個年に過ぎずして、是れに由つて男子は女子三百二十五人に對し五百六十人と爲るも、尙ほ上述せる諸原因及び男子の晩婚は兩者をして同數たらしむるものである。(ibid., pp. 66-67)。

女子十三人に對し、男子は十四人の割合に於て存し、而して兩者は又た同一比例を以て死亡するに拘らず、醫家の說に據れば、男子の患者一人に對し、女子の其れは二人の割合であると云ふ。蓋し女子は萎黃病若しくは之れに類似せる不例、妊娠、流産、分娩、乳脹、腰氣等の患みあるが故である。是れに由つて、死亡數にして疾病數

に比例するものとしたならば、男子に比して婦人の死亡數は多數でなければならぬ譯である。而も斯くの如き結論は醫師が克く是れ等の疾病を治療するものと認むるか、然らざれば、恰も女子が女性特有の疾病に由つて死亡すると等しく、男子が婦人に比して不節制なるが爲めに、其の不行跡に由つて死亡するものと看做すに由つて緩和せられなければならぬ。斯くて男子は女子に比して生るゝこと多きも、死することも亦た大であるのである。(Ibid., pp. 67-68.)

一夫多妻が禁止せられ、而して獨身生活の行はるゝ加特力教國に於ては人民の増加は阻止せられる。蓋し結婚期の婦人十人に對し男子十人存する場合に、二名の男子が獨身の生涯を送るとしたならば、二人の婦人は未婚の状態を維持するの已むなきに至り、全然男子と接することなきか、若しくは娼婦と爲り、多數の男子に交りて其の生殖力を害し、墮胎若しくは殺兒の罪惡を行はしむるに至るが故である。Grant は以上の所言に據つて法が私通及び姦通に對して極めて峻嚴であり、又た須らく峻嚴なる可き理由明かなる可しと思惟する。即ち一般的自由が存するとしたならば、人類の増加は辛じて狐の其れに類するに過ぎざる可きが故である。(Ibid., pp. 69-70.)

即ち彼れは、放縱なる性欲の満足が人口減少の原因たることを力説する者である。而して彼れは論結して曰く「土地が富の母にして子宮たるが如く、人は其の父たるが故に (Hands being the Father, as Lands are the Mother and Womb of Wealth) 君主は其の人民の數に従つて強大なるのみならず、又た富裕なるを以て、國家が結婚を奨励し、放逸を阻示し、以て神法の侮蔑せられ、胃瀆せらるゝを防ぐと等しく、國家自身の利益を進むる所以亦た異とするに足らず云々と。而して彼れを以て觀れば、這個男子の超過に由り一夫多妻に對して斯くの如き自然の障礙存するは人類に取つて祝福である。蓋し一夫多妻の状態に在つては、婦人は彼れ等が現今、此の地に於けると等しく、其の良人と平等一様の經費を以て生活すること能はざるが故である。而して Grant は之れが理由を、夫が一人の妻と等しき贅澤の程度を以て三人の妻を養ふこと能はざるの事實に求むるものではない。蓋し、夫は三人の妻を有するが故に自ら其の所得の四分の一を以て生活し、一人の妻を有して之れと其の所得の一半を分ち合ひ同一様の生活を爲すと等しく、三人の全部と平等の生活を爲すを得可きが故である。彼れは寧ろ其の理由を以て、夫



が其の妻の總べてをして彼れ等相互に對し、又は自己に對して永く靜穩を保たしめんが爲めには、彼れ等の總べてをして更らに大なる畏敬と、更らに小なる失費の裡に永く生活せしめざるを得ざるの事實に求める。即ち最も貧困なる臣民は最も容易に之れを支配し得るが故である。(Ibid. pp. 7071.)

Grant は又た倫敦市の出産人民の數が通常の出産及び死亡の割合を以てする時は、約七ヶ年、惡疫の結果を見積る時は八ヶ年間に倍加するものと計算する。而して同市は出産者の二萬四千の配偶、即ち全人口の八分の一を有するが故に、八年を八倍せる六十四年内に同市の全人民は外人を收容することなきも二倍と爲る。斯くの如き計算は彼れが這般の來住を加へて五十六年内に二より五に膨脹すると做せるものと矛盾することなきものである。斯くの如き割合を以てアダム及びイヴの夫婦が、聖書に依據せる世界の年齢たる五千六百年中の六十四年毎に倍加するとするならば、それは現今地球上に存するよりも遙かに多數の人民を產生す可きである。是に於て乎、彼れは此の世界を以て、或る人々の誤つて想像するが如く、更らに約十萬年の齡を有するものにも、又た聖書の記す所以上に古きものにも非すと觀るのである。(Ibid., pp. 8586.)

洵に John Grant は早く人口統計の重要な所以を認め、而して是れよりして科學的方法を以て其の國の社會的及び經濟的狀態に關する意見を引けるものゝ一人であつた。彼れは人口が幾何學的比率を以て増加するの傾向を有するも、而もそれは戰爭及び惡疫等の如き、後人の謂ゆる「積極的抑制」によつて對抗せらるゝの事實を明確に認めることが出來た。而も彼れが殆んど全く「豫防的抑制」を認むることを得なかつたのは、恰も疫癘後に於ける此の當時の事情が人口過多の結果を思議するの要なからしめ、人口の増加を以て最も有利なりと思惟せしめたるに由るものであらう。(Charles Emil Stangeland, Pre-Malthusian Doctrines of Population: a Study in the History of Economic Theory, 1904, p. 143.)

## 四

他の王立協會員にして、一千六百七十四年に於ける Grant の死後二年、其の著前掲 Natural and Political Observations. の訂正増補第五版を出版し、Evelyn, Aubrey, Halley, Burnet 及び Stoughton 等によつて其の眞著者と誤認せられたる Sir William Petty は又

た人口稠密が國家の收入に對して直接の關係を有することを認め、人民の僅少なることは眞の貧困である。而して八百萬の人民を有する國家は四百萬を有するに過ぎざる同一廣袤の國土に比して二倍の富を有するものである。即ち多大なる經費を要する統轄者は少數に對すると殆んど等しく多數に對しても克く其の任務を全うするを得可きが故である。(A Treatise of Taxes, op. cit., p. 16)。彼れは又た國家が其の人民を死刑に處し、其の肢體を切斷し、若しくは之れを禁錮するを以て、自ら損害を蒙るものと做し、斯くの如き刑罰は出來得る限り之れを回避し、勞働及び公共の富を増加す可き罰金刑に代ふ可きものと論じてゐる。(ibid., p. 49)。

Petty は其の Another Essay in Political Arithmetick, Concerning the Growth of the City of London: with the Measures, Periods, Causes, and Consequences thereof, 1682. に於て、普く人口稠密なる場合には、年々五十人中の一人が死亡するに過ぎずと做すの意見と、往々二十三の埋葬に對し僅かに二十四の出生ありしに過ぎずと做すの報告にして普遍的且つ恒久的に眞なりとしたならば、人民は約一千二百年内に倍加するに過ぎ

ずと稱せもるゝを得可きものと考へる。(ibid., pp. 11-12)。人口の密度が、さまで大ならざる場合に於ては倍加の割合は更らに急速なる可きである。今、自然的可能なる場合には毎六百の人口に對し年々の出生は七十五にして死亡は僅かに十五に過ぎずとしたならば、其の人民の年々の増加は六十なる可く、斯くて上記六百の人民は十年内に倍加するを得可きである。(ibid., pp. 13-14)。即ち Petty は人口が幾何級數の割合を以て増加す可き傾向を有するものと認むるも、而も其の倍加の期間は世界の年齢既存の人口及び其の他の事情に由つて相違するものと思惟するのである。

是に於て乎、Petty は這般の困難を回避し、斯くの如く甚だしき相違を調和せしむるが爲めに、年々の死亡數五十と三十との中間を取りて四十と定め、出生數二十四及び死亡數二十三と死亡數四に對する出生數五との中間を取りて、凡そ九人の死亡に對して十人の出生あるものと認める。斯くの如き假定の下に於ては、上記六百人中、年々の死亡は十五人、出生は十六人、三分の二であつて、増加は一人、三分の二、即ち一人の三分の五でなければならぬ、而して此の數を以て三分の一千八百

即ち六百人に比する時は、倍加の時期は三百六十年と爲る。此の中には戦争、疫病及び飢饉の影響をも認むるものであつて、是れ等のものゝ結果は其の發生せる時及び場處に於ては戦慄す可きものもあるも、三百六十年の期間内に於ては國家全般に取つて毫も重大なるものではない。二十年間に於ける英國の疫病は漸く全國民の四十分の一を奪へるに過ぎずして、十ヶ年間に互れる前代未曾有の内亂も全人民の四十分の一以上を拉し去ることがなかつたのである。(Ibid., pp. 14-16.) 斯くの如き計算に基きて Petty は現在の人口が將來の二千年内に地球上居住し得可き土地の各二エーカーに對し一人の割合まで増加するに至り、是に聖書の豫言せる戦争と大屠殺の生ずるを免るゝことを得ざる可しと説いてゐる。「社會政策時報」第五十六號所載拙稿「人口増加と社會進歩(人口學說史小觀)參照」。而も彼れも亦た Grant と等しく人口過多を憂慮するの言説を爲すものではなかつた。

而して彼れは、其の一千六百九十年の著 *Political Arithmetick, or a Discourse Concerning the Extent and Value of Lands, People, Buildings, Husbandry, Manufacture, Commerce, Fishery, Artizans, Seamen, Soldiers; Publick Revenues, Interest, Taxes, Superlucration, Registries, Banks;*

*Valuation of Men, Increasing of Seamen, of Militia's, Harbours, Situation, Shipping, Power at Sea, &*

の第一章に題して、「一國にして領土狭く、人口少なきも其の地位、貿易及び政策によりて、遙かに之れよりも人民及び領土大なるものと富強の點に於て相等しきを得可く、而して特に海運及び水運の便は之れに資すること最も大に、最も根本的なものである」と稱してゐる。一エーカーの土地が地味の相違に由つて二十エーカーの土地に等しき穀物を生じ、二十エーカーの土地に等しき家畜を養ひ、惡地が改良を加へられて美田と爲り、沼地が排水によつて牧場たらしめられ、荒地が亞麻及び苜蓿の播種によつて其の價值を百倍ならしめ、元と牧草地たりしものが建物の敷地と爲れるが爲めに、其の地代を百倍ならしめ得ると等しく、或る人は他よりも一層敏捷若しくは強壯であり、一層勞働に堪ゆるの力が大であり、技巧を有する一人の人間は之れを有せざる多數に等しき仕事を行ふを得可く、一人の人間は水車を有するが爲めに二十人の人間が臼を以てするに等しき穀物を搗くことを得可く、一人の印刷職は一百人が手寫し得るに等しき書冊を作製し得可きである。(Ibid., pp. 1-2.) 即ち彼れは土地の改良と技術の發達が廣大なる土地と多數の人

口とに等しき作用を爲し得可きことを認めてゐた。

## 五

マーカンチリストは國家に取つて致富増貨の常道として看做さる可きものを以て外國貿易なりと觀じたのであるが、而も當時の思潮は亦た貿易に取つて眞の根元且つ基礎たるものを以て狭少なる土地の上に密集せる大多數の人民に存するものと做すの主張を産んだ。(三田學會雜誌第十六卷第七號拙稿「サー・キリヤム・テムブルの經濟論」(上)參照)。而して第十八世紀に入つては人口が貿易に依頼すると做すの議論が専ら強調せられた。(Daniel Defoe, A Plan of the English Commerce, 1728; Joshua Gee, The Trade and Navigation of Great Britain considered, 1729. 參照)。實に當時の論者が貿易差額を重視せるは其の輸出財を以て最大なる人口に業務を與ふる國民が最も好果を收む可しと思惟せるが爲めであつた。而して人口が貿易よりも寧ろ農耕牧畜に依頼するの事實が強調せらるゝに至つて、食料を以て人口の尺度と觀るの説を産まなければならなかつた。

之れを要するに Petty 等は第十八世紀末に於ける人口論者の如く、貧の原因を探究するが爲めに、人口の増加を論せずして、富の原因を攻究するが爲めに、之れを取扱つたのである。而して經濟論客の主題が「國民」よりして漸次「個人」に移れる時、一國の人口が其の當時の經濟的及び社會的組織によつて提供せられたる生活資料の限界以上に増加せんとするの傾向あるものであり、又た個人的自由及び分有財産の制度を基礎とせる現在の國民經濟に在つては、産出せられたる財貨の分配が交易の事實に基くものであつて、其の配分の高は各個人の生産上占むる地位によつて決定せらるゝが故に、爰に激烈なる自由競争を喚起し、其の極、人口過多の事實が平等に一般生活状態の下降を促さずして、然も、一部人士の驅除黜斥に終るの事實が想見せらるゝに至つた。

而も人口過多の事實が一面に於て國民經濟の進歩に取つて最有力なる原動力たることあるは否む可らざる所のものである。是に於て乎、近時に至り人口の増加は之れに關聯して國運の發展を來すの事實一般に承認せられ、人口増加の結果を悲觀するの念漸く減退して、却つて人口減少の事實が次第に一國の不利損害として思惟せらるゝに至つた。爰に *Fewness of people, is real poverty.* と叫びたる William

Partyの言は新たに甦らなければならなかつた。

(附記) 吾人は近く「社會政策時報」に寄せたる前掲小論文に於て、人口學說史の概観を與へんことを企圖した。本篇は些か其の一部を擴大して論じたるものである。筆者は篇中特に前論文中に逸したる Growthの人口論を紹介するに努めた。而して前論文中に擧げたる字句は出來得る限り茲に之れを繰返すことを避けた。

## 錢莊の發行する莊票に就て

及川恒忠

支那各地の錢莊が發行する『莊票』は、いろいろな意味に於て重要なものである。是を市場の實際から看るに、莊票は都市の有らゆる商業に於て極めて圓滑に轉帳流通し、銀行兌換券と略ぼ同様な職分を果してゐる。取引の大部分は概ね之が受授に由つて行はれ現金の受授に俟つことは比較的尠ない。勿論小切手(支票)も現金受授の代用に使はれること相應に盛であるが、莊票受授の盛行に較らば、到底同日の談でない。

是を錢莊自身に就て看る。莊票の發行は錢莊の行ふ各種の銀行業務バンキヤンクの中、極めて慎重に嚴肅に取扱はれねばならぬ最も重要な業務である。何故といふに、錢莊の行ふ貸附は多くは現金によるのではなく主として莊票を以て行はれ、且つ錢莊